

ふらさとよかわ第13号

# 府安古墳

2003

兵庫県吉川町教育委員会

## 序 文

中国自動車道を西へ向かって走っていると、吉川ICの出口にかかりますが、しばらく行くと下り車線だけがトンネルになっており、誰でもおやつと思われるに違いありません。

中国自動車道建設工事計画の中で有安古墳が存在するが、古墳を避けでは工事できないということでした。しかし、吉川町の貴重な文化財をどうしても残したいという地元の要望により、関係者の熱心な努力が実を結び、道路をトンネルにする工法によって有安古墳が現状のまま全面保存されることになり、今日に至っています。

近年、有安古墳は、町の代表的な古墳として、小中学校の総合的な学習や社会科学習に活用されたり、歴史に関心のある人が見学するというが多くなってきています。

今回の調査で、長い間疑問であった点も解明され、吉川町の貴重な文化遺産としての輝きがいっそう増した思いです。

2003年3月

吉川町教育委員会

教育長 長谷川義雄

## 例　　言

1. 本書は、兵庫県美嚢郡吉川町有安字寺谷4251に所在する有安古墳（2号墳）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査、報告書作成作業は、国庫補助事業とし、平成14年12月12日～平成15年3月31日の間、吉川町教育委員会が主体となって実施した。調査の体制は以下のとおりである。

教　育　長　　長谷川義雄

教育次長兼  
生涯学習課長　生田　一

調査担当者　　畠中　剛
3. 調査参加者  
(作業員) 戸田利康 戸田隆総 荒巻美智代 戸田繁和 山城健宏  
福田麻里子  
(整理員) 鎌田映子 (順不同 敬称略)
4. 本書の執筆にあたっては畠中が行い、以下の文献より図面、記述などを引用、参照させていただいた。
  - (1) 是川 長「美嚢郡吉川町有安古墳測量調査報告」(兵庫県教育委員会編『中国高速道建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』兵庫県文化財調査報告第7冊) 昭和47年3月
  - (2) 川口修実「有安2号墳・実楽2号墳測量調査報告書」(花園大学考古学研究室編『花大考古報告13古墳測量集成』1988. 12)
  - (3) 兵庫県教育委員会「中国自動車道有安トンネル補修工事に伴う有安古墳発掘調査実績報告書」平成12年度
  - (4) 上記、同報告書平成13年度調査分
5. 古墳のラジコンヘリによる上空写真は、有限会社アムキーに委託したが、それを除く写真については調査担当者が撮影した。
6. 表紙題字は、鎌田映子の筆による。
7. 今回の調査資料については、吉川町教育委員会で保管している。
8. 現地調査から報告書作成まで以下の機関、方々にご協力、ご教示をいただいた。記して感謝の意を表したい。(順不同 敬称略)

兵庫県教育委員会　日本道路公团関西支社福崎管理事務所  
有安地区　石田信彦 戸田重忠  
武内好敏 森下大輔 北播磨地区文化財行政担当者諸氏

## 有安古墳発掘調査報告書目次

### はじめに

### 例　　言

1. 有安古墳をとりまく環境 .....	5
(1) 吉川町の古墳群 .....	5
(2) 有安古墳群 .....	6
2. 有安古墳発掘調査 .....	8
(1) 調査に至る経過 .....	8
(2) 調査の経過 .....	10
3. 有安古墳発掘調査の成果 .....	11
(1) 古墳の立地 .....	11
(2) 古墳の調査 .....	11
4. 出土遺物 .....	15
(1) 土器 .....	15
5.まとめ .....	15
6. 今後の展望 .....	16

## 挿 図 目 次

図1. 吉川町の古墳群	5
図2. 有安古墳群	7
図3. 有安古墳地形測量図（調査前）	12
図4. 有安古墳地形測量図（調査後）	13
図5. 調査トレンチ土層断面図	14

## 写 真 目 次

写真1. 有安古墳上空より全景（工事、調査前）	17
写真2. 有安古墳上空より全景（工事、調査後）	17
写真3. 1トレンチ	18
写真4. 1トレンチ土層断面	18
写真5. 2トレンチ	19
写真6. 2トレンチ土層断面	19
写真7. 3トレンチ	20
写真8. 3トレンチ土層断面	20
写真9. 調査風景	21
写真10. ラジコンヘリによる撮影	21
写真11. 埋めもどし	22
写真12. 調査スタッフ	22

## 1. 有安古墳をとりまく環境



図1. 吉川町の古墳群

### (1) 吉川町の古墳群

吉川町では、先土器時代、縄文時代の遺跡については、確認されておらず、弥生時代、古墳時代、中世以降と存在する。中世については、吉川の文化が最も開花したであろう時代で鎌倉、室町期の集落、山城などをはじめ、国指定重要文化財に指定されている建造物も多数存在している。

しかし、吉川町の古代を語る上では、古墳(群)の存在が重要な資料であり、以下、吉川町の古墳群について述べる。

吉川町の古墳は、前期古墳や単独墳ではなく、すべて後期の古墳群中のものである。古墳群は町の西部に集中している。西から上松古墳群(④)、古市古墳群(③)、有安古墳群(①)、実楽古墳群(②)等が存在する。これらの古墳群は、いずれも直径十数メートルの円墳が十基足らずで構成していたと考えられ、埋葬施設は、いずれも横穴式石室か木棺直葬などの形態をとっていたと思われるが、上松1号墳は粘土椁、古市1号墳の埋葬施設は、組合式石棺と、若干、特異な様相もうかがえる。遺物は、発掘調査された実楽1号墳、上松5号墳などから、須恵器、鉄刀、刀子、馬具、金環、勾玉などが検出されている。

これら各古墳群に伴う古墳時代の遺跡も水田面で確認しており、竪穴式住居址や柱穴、土器を多量に包含した土壙などが検出されている。

この様相から吉川町は古くは、西から発達していったと考えられるが、残念なことに、これらの古墳群は、いずれも近、現代の開墾にともない、ほとんどが消滅し、吉川町では、今回調査の有安古墳をはじめとして、実楽2号墳、上松1号墳など数基が存在するのみである。

	古墳群名	数（基）	立地	出土遺物等	調査
1	有安古墳群	10	水田面、尾根上	過去に甲冑、直刀、鉄族、須恵器、管玉が採集されている。	一部済
2	上松古墳群	5	水田面	5号墳の調査で須恵器、金環等が出土、1号墳完存、2、3号墳墳丘わずかに現存	済
3	古市古墳群	3	尾根上	3基とも未確認ながら、1号墳より出土と伝わる須恵器、また、組合式石棺の写真有り	未
4	実楽古墳群	2	尾根上	中国道建設の際、1号墳調査、土器、鉄製品、勾玉出土、2号墳は横穴式石室完存	一部済

### 各古墳群の概要

#### （2）有安古墳群

有安古墳群は、町の西部で美義川と北谷川が合流する地点から北東800mの地点、大字有安地区に存在する。古墳は標高98m～140mを測る水田面、尾根の頂部に作られている。もとは10基存在したといわれている。以下、順に『吉川町誌』、また地元の方のご教示などを参考に、簡単にその様相を述べる。

1号墳は、古墳群の最北部、最高所の標高140m程度、字北谷に位置し、当初、径2m程度の小さな盛土の上に愛宕社の祠が置かれていた状態であった。約16年程前、愛宕社を新調の際、立ち会い調査を実施したが顯著な遺構、遺物は検出されなかった。

2号墳は、今回調査の有安古墳であるので別項にて詳述する。

3号墳は、同じく字北谷に所在するとあるが不明である。

4号墳は字上ノ木、2号墳と同一尾根先端の共同墓地の中央部に径6m程度の墳丘と思われる盛土が存在する。この地点は、東南に大きな岩の露頭があり、それが牛の頭に似ていることから「牛墓」といわれている。

5号墳は、字上ノ木、稻荷社が祭られ、周囲にも盛土が残っている。

6号墳は、字上ノ木、大歳神社の鎮座する付近に存在した、あるいは3基以上あったともいわれている。大正年間？発掘され甲冑、直刀などとともに、多数の土器が出土し、その一部を現在の東京国立博物館に寄贈し、受領証を交付されたという記録も残っている。後、昭和57年当委員会が同博物館に照会を行ったところ回答があり、大正7年4月に兵庫県より、同博物館に対して、「美義郡北谷村内有安村字

上ノ木発掘埋蔵物を送る」という当時の送付状、また、雲珠残欠1片を受けとったとの受領証のコピーが送付されている。

7号墳、8号墳とも上ノ木に所在したと伝えられているが不明である。

9号墳は、町誌によると字丁ノカチに所在し、小規模な盛土があり、その上には祠が存在しているとあるが、現在のところ確認できていない。

10号墳は、同じく字丁ノカチに所在し、現在、「千年の古墳」といわれているが、わずかに土盛りが存在している。昭和13年に発掘され、杯身、紅がら付着の杯蓋、提瓶、鉄鎌、直刀、刀子、管玉などが発見されたといわれている。また、現在はその出土を伝えた石碑が建立されている。

また、10号墳の北東の水田面で平成13年公共下水道工事のう回路敷設工事に伴い立ち会い調査を実施したところ、多量の須恵器片とともに集石遺構？を確認した。有安古墳を形成する集落であった可能性がある。

以上、有安古墳群の個々の古墳について述べたが、存在について考えてみる。

1号墳は立ち会い調査の結果や周囲の地形も考慮すると、古墳であった可能性は少ないと考えられる。むしろ2号墳が有安古墳群の最高所に位置する存在であったかの感がある。3、7、8、9号墳については現在、明確な盛土がないため、位置については確認できないので、今後の調査の成果にゆだねる。4号墳については、若干の盛土と尾根先端という好条件の立地から古墳の可能性が高いと考えられる。また5号墳についても同様である。6、10号墳については、多数の遺物の出土が確認されており、同様に古墳であった可能性が高いと考えられる。



図2. 有安古墳群

## 2. 有安古墳発掘調査

### (1) 調査に至る経過

有安古墳2号墳（以下有安古墳という）は、県下では数少ない方墳として昭和41年に中国自動車道建設に伴う分布調査で報告された。しかし、道路の計画路線上に位置するため『山陽新幹線・中国縦貫道文化財対策審議会』より「保存を申し入れること」との答申を受け、兵庫県教育委員会（以下、県教委という）から日本道路公団（以下、公団という）に申し入れ、協議が重ねられた。

その結果、路線変更は困難であり、工法変更により「N.T. Pトンネル特殊工法」で保存された。トンネルの施工に当たっては墳丘周辺は土被りが少なく、地盤が軟質であったため、水平ボーリングを応用して引抜き鋼管パイプ（コアーチューブ材）を挿入し補強したあとで掘削するという工法であった。しかし、古墳本体は保存されたものの、実際の整備の状況は、北、東側にはフェンスが無く、そのまま自動車が猛スピードで疾走するのが眼下にのぞまれ、大変危険な状態であった。そのため立ち入りは一切厳禁とされ、西、南側には有刺鉄線が厳重に張りめぐらされていた。また、樹木の繁茂が著しかったため、有安古墳の姿がフェンスの外より確認することができず、町の貴重な文化財としての認識、活用が困難な状況であった。

このような状況にかんがみ、吉川町教育委員会（以下、町教委という）が、平成9年に有安古墳が見学できるような整備を公団に申し入れをしたところ、公団のご厚意により樹木を伐採し、四方をフェンスに取り替え、施錠のできる出入り口も設けられ、見学の利便性をはかっていただけたこととなった。

以後、多数の見学者が訪れ、町の歴史や文化財保護について生きた学習資料として活用され、また極めて特殊な保存方法の姿から町のシンボルとしての位置づけもなされつつあった。

しかし、事態は一変する。トンネル完成後、約20数年が経過していることにもよるが、前述の特殊な工法を採用していることが主因になり、地表から浸透した雨水がトンネル上面の凹凸に常に滞水状態となり、このため覆工コンクリートの環境が悪く、発生したひび割れに水が浸入する。それがコンクリートの鉄筋を腐食させ、腐食すると堆積が2.5倍に膨張し、天井の被りコンクリートが押し下げられ、道路上に落下する危険性が出てきた。現時点で、すでにコンクリートにひび割れが生じ、



有安トンネル補修工事前

縫目部の漏水及び亀甲クラックが認められていた。

この事態については当初、公団より町教委に状況報告、並びに補修工法もトンネル上面の土砂を撤去し、さらに上面に防水シートを張り、上部からの水の浸透を遮断する「上面防水シート工法」が提案された。

町教委担当が工事範囲について公団と現地立ち会いをしたところ、墳丘の北側の裾がわずかに取り込まれる程度の範囲であった。しかし、当時、発掘調査も実施されておらず、無論、墳丘裾の位置も確定されていない状況であったので、墳丘裾の確認の発掘調査を早急に実施すべきとの判断をしたが、その後、公団の工事に伴う埋蔵文化財の調査、取り扱いについては県教委で実施するとの定めにより、町教委も協議には立ち会い意見は述べられるものの、保存協議の中心は県教委と公団関西支社福崎管理事務所の間で進められることとなった。

その後、保存協議の詳細は不明であるが、平成12年の6月6日より県教委による墳丘裾確認調査が開始されるに至り、トンネル上とはいうものの完存していた有安古墳についに発掘のメスが入れられた。

調査（第1次）は、工事予定範囲内である北側に幅1m～2m、長さ4.5m～6.5mのトレンチ5箇所が設定され、重機と人力掘削の結果、土層の観察により墳丘裾が明確になるとともに、調査担当者により墳丘の過去の測量実測図の検討が合わせて行われ、有安古墳の墳形は円墳の可能性が強いとの見解が示されている。また、工事予定範囲外の主体部にもトレンチが設定され、木棺直葬と思われる幅92cm、長さ280cmの墓壙が検出され半分精査された後、そのまま埋め戻された。

工事予定範囲内に、墳丘の裾が取り込まれてしまうという1次調査の結果をふまえ、さらに県教委、公団、町教委の間で保存協議が何度も重ねられたが、工法変更などの実施は困難という結果となり、やむなく、工事により損壊される部分についてはその全面について発掘調査を実施し、記録保存の措置がとられることとなった。

全面調査（第2次）は、平成13年11月より、1次調査と同様、有安古墳の北側、約80m<sup>2</sup>に及ぶ範囲で墳裾の墳丘が約2.5mにわたって削平されることになり、町教委が当初公団からの協議を受け明示された工事範囲からすると、かなり主体部に向かって墳丘が削平される印象を受けた。調査の結果として、周溝、葺石などは検出されず、土層の観察、また墳丘の測量実測図に基づき担当者により墳形の



有安トンネル補修工事後

推定が試みられ、さらに円墳の可能性が強いとの見解が示された。

2次調査の現地終了をもって、トンネル補修工事が開始され、平成14年の6月頃まで終了した。最後に、全面調査実施済みの箇所は埋蔵文化財にはあらずという当然の理屈にもかかわらず、県教委、町教委により墳丘の旧状を復元して欲しいとの要望を公団に行ったところ、厳密な復元はなされなかったものの、旧地形の復元につとめていただけた。

トンネル補修工事の計画直前より、あるいは工事に伴う保存協議を重ねていく中で、現状保存しているだけにとどまらず、町の貴重な文化財として有安古墳をどのように位置づけるかという問題に直面することになった。町教委では、その課題解決の重要なキーポイントの一つが有安古墳の墳形が円墳か方墳かであり、それを明確にすることが今後の有安古墳の保存の方向付けを行うことになるという結論に達した。また、同様の県教委からの強い指導もあり、今回、町教委を調査主体とし調査費については、文化庁の国庫補助金を受けて、未調査の西側、南側の墳形確認の発掘調査を実施することとなった。

## (2) 調査の経過

今回の調査地点は、公団の所有地であり本線トンネル上に位置するため、公団に対し土地の発掘調査許可と道路使用の許可を同時に申請し、平成14年12月6日に許可を受け、同月12日より現地調査に着手した。

調査は、その立地から、作業員の安全確保は言うに及ばず、特に強風による伐採後の枝や調査トレンチ被覆シート、ゴミ等の飛散、落下などの防止に留意しつつ、進行した。発掘は、簡易な伐採の後、5箇所のトレンチを設定し、平成15年1月末ではほぼ掘削、土層断面の実測を終了、同月14日午前ラジコンヘリにより古墳の上空より撮影を実施し、後日、県教委による現地確認も行われた。2月1日午後より現地説明会を実施し、50名もの熱心な参加者があった。その後、トレンチの埋め戻しと墳丘実測を行い、2月28日には、ほぼ終了した。

同年3月より報告書作成作業に着手するとともに、若干の現地補足調査を実施し、同月末には調査のすべてを終了した。



現地説明会

### 3. 有安古墳発掘調査の成果

#### (1) 古墳の立地

古墳の立地は、北谷川の北方、北東から南西に派生する尾根の頂部に位置している。古墳は標高133m付近にあり、墳丘上から北谷川と美糞川の合流地点及び水田面一体に広がる集落が一望に見渡すことができる。



有安古墳遠景（西より）

#### (2) 古墳の調査

調査前の墳丘の現状は、すでに北側は県教委の2度にわたる発掘調査を経た補修工事により原形をとどめておらず、また以前より南西については、土取りと見られる擾乱があった。比較的原形をとどめていたと思われたのは、西、東、南側部分であった。特に東、南側の131.4m前後のコンタライインが段築の存在と方形墳であることの証明をしていた。

しかし、今回の調査でトレンチを設定するため、雑木や落ち葉を入念に除去したところ、東、南側の現地表面に畑の畝状のものが多数認められた。この状況から、中国道建設の際にから言っていた戦時中の開墾による墳丘の形状の変更が推測されたが、さらに詳細なデータを得るためにトレンチを設定し、発掘調査を実施した。

今回の調査も県教委の2度の調査と同様に、墳丘を明確にする周溝、葺石等の遺構は検出されず、墳丘盛土の観察により基底あるいは前述の変更を確認する方法しか取れなかった。

墳丘の東側には1トレンチ、南側には2トレンチ、西側には3トレンチを設定し、調査を実施した。トレンチの基本層序は暗褐色土、黄褐色土が微細に変化するもので、地山ベースは暗青灰色の粘土、または黄褐色の砂岩であった。

1トレンチは、墳丘の東側で東西5m×南北7mに加えて地形に合わせて拡張した変形トレンチである。精査の結果、上層の暗褐色土、黄褐色土、地山の黄褐色砂岩層が乱れており、盛土や墳丘基底は確認できなかった。また遺物は確認できなかった。

2トレンチは、墳丘の南側で東西幅1m×南北4m、深さ1.2mで、土層観察から黄褐色粘質土の地山層より、盛土を立ち上げていることが確認され

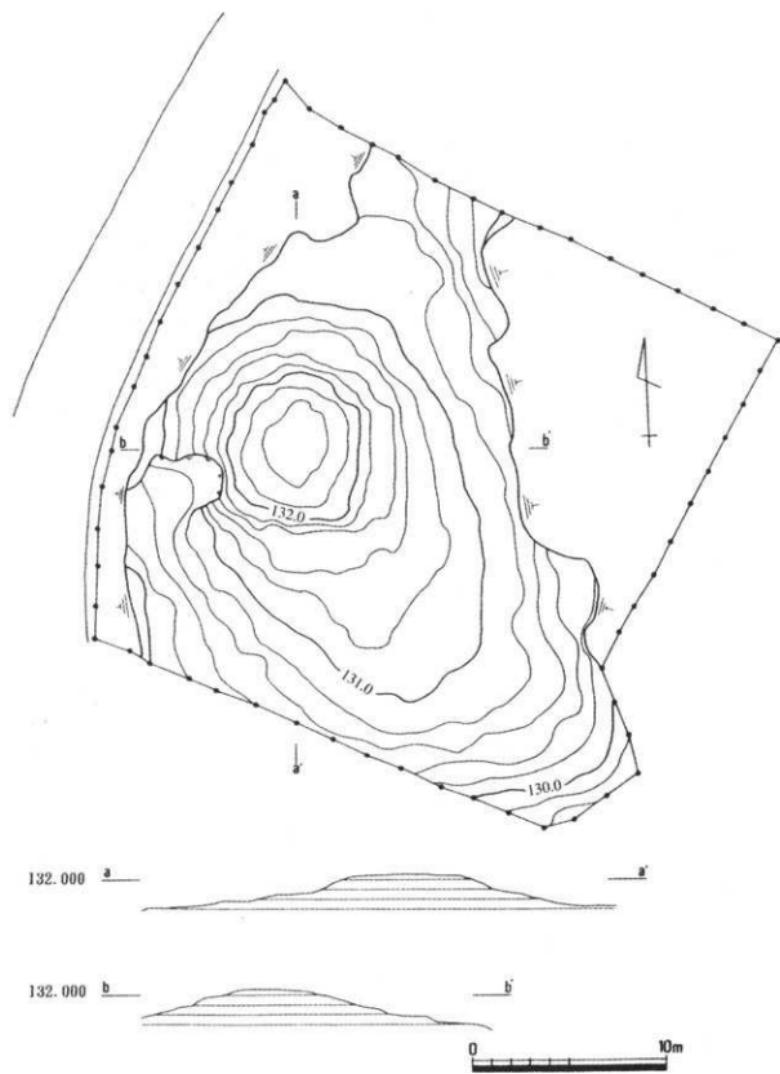


図3. 有安古墳地形測量図（調査前）

（花園大学考古学研究室作成）

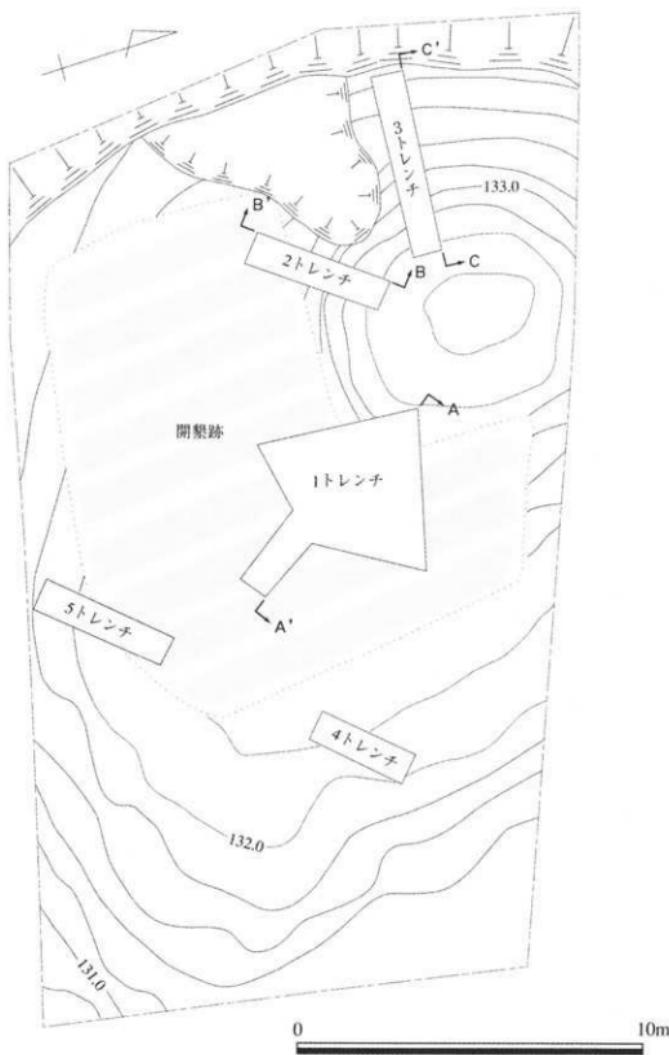


図4. 有安古墳地形測量図（調査後）

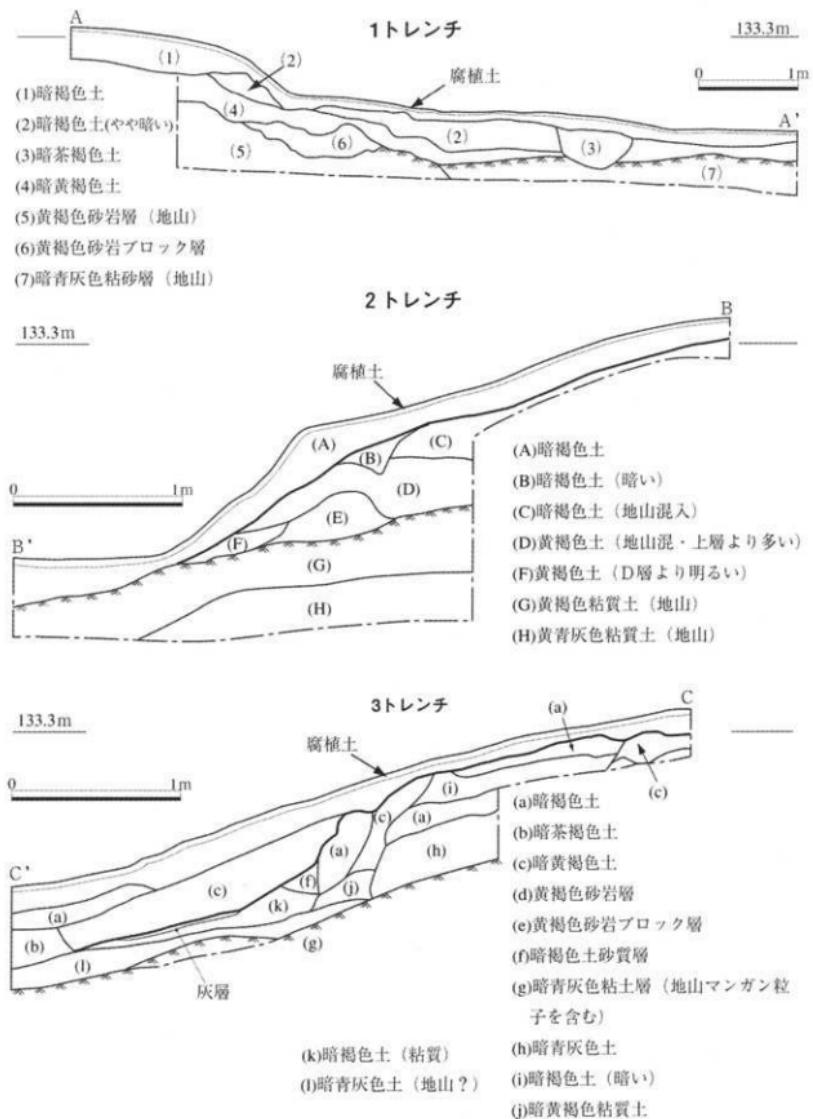


図5. 調査トレンチ土層断面図

た。また、須恵器片が少量出土した。

3トレンチは、墳丘の西側で東西5.5m×南北幅1m、深さ1mで、土層観察から暗青灰色粘土の地山層より、盛土を立ち上げていることが確認された。

また、墳丘の基底部の立ち上げ部には灰層が検出された。  
遺物は出土しなかった。

4トレンチは、東西幅1m×南北3m、深さ0.7m、5トレンチは、東西幅1m×南北4m、深さ0.7mで設定したが、顕著な遺構、遺物は確認できなかった。

以上の結果、2、3トレンチから墳丘の基底部が確認された。また、1トレンチは土層の乱れより、後世に墳丘が攪乱された状況がほぼ確認された。



1トレンチ攪乱土層

#### 4. 出土遺物

##### (1) 土器

今回出土したのは、2トレンチから須恵器片を検出した。いずれも杯蓋、甕、壺の小片であった。おそらく、埋葬施設から散逸したものと思われる。

#### 5. まとめ

今回の調査の結果、有安古墳の東、南側については、戦時中の開墾により墳丘の形状が改変されたと考えられる。従って、東側に認められた段築も同様の要因により、生じたものと判断され、方墳と思われていた有安古墳は、現在までの発掘調査で認識されたデータ



墳丘南側開墾の痕跡

から、木棺直葬の埋葬施設をもつ直径12m程度の円墳であったと考えられる。

古墳の時期については、出土土器より古墳時代後期（6世紀後半）と思われる。

## 6. 今後の展望

有安古墳は円墳であることがほぼ確定し、長い間の疑問がようやく解決された。しかし、その姿のほとんどを補修工事、またそれを契機に実施した度重なる発掘調査により破壊したことの代償は大きい。また、今回、調査データの統一化や資料のすべてを本報告書に集成できなかつたことに、吉川町で担当者に着任以来、我が子のように有安古墳をあたためてきた者として、身を切られるような思いとともに、今さらながら我が身の力不足を痛感している。

しかし、このような状況になったとはいえ、数少ない吉川町の古墳の中の重要なものの一つであり、吉川町の歴史を語る貴重な資料としての位置づけにはかわりがない。また、有安古墳が高速道路上に保存されていることは、開発と文化財保存とが調和した、まさに理想の姿で、当時のみならず現在において、全国的に見てもあまり例がない。その点からも有安古墳は、吉川町のシンボルとして、未来へと守り伝えていかなければいけない重要な文化遺産と位置づけ、今後の具体的な活用の方策を、早急に構じることがこれから の使命であると考える。



写真1. 有安古墳上空より全景（工事、調査前）

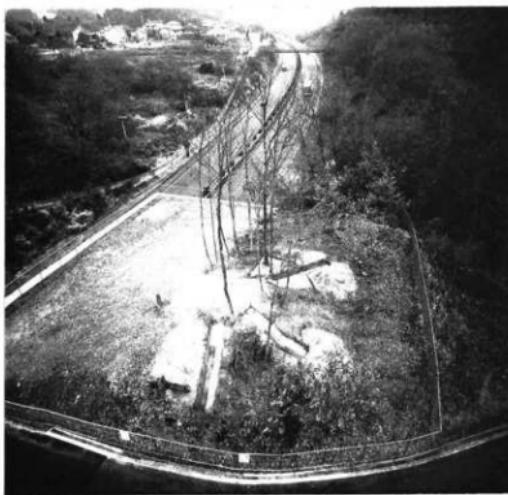


写真2. 有安古墳上空より全景（工事、調査後）



写真3. 1トレンチ



写真4. 1トレンチ土層断面



写真5. 2トレンチ



写真6. 2トレンチ土層断面



写真7. 3トレンチ



写真8. 3トレンチ土層断面



写真9. 調査風景



写真10. ラジコンヘリによる撮影



写真11. 埋め戻し



写真12. 調査スタッフ

## 報告書抄録

ふりがな	ありやすこふん						
書名	有安古墳						
副書名							
卷次							
シリーズ名	ふるさとよかわ						
シリーズ番号	第13号						
編著者名	畠中 剛						
編集機関	吉川町教育委員会						
所在地	〒673-1114 兵庫県美濃郡吉川町吉安246 TEL 0794 - 72 - 1577						
発行年月日	西暦 2003年 3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	.	.	.	.
有安古墳	兵庫県	28321	—	34度 52分 58秒	135度 06分 08秒	2002.12.12 1 2003.3.31	35m <sup>2</sup> 墳形確認調査
	美濃郡						
	吉川町						
	有安						
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
有安古墳 (2号墳)	古墳	古墳時代	墳丘	須恵器片			

---

ふるさとよかわ 第13号

2003年3月31日

## 有 安 古 墳

編集・発行 吉川町教育委員会生涯学習課

〒673-1114 兵庫県美嚢郡吉川町吉安246

☎0794-72-1577

印 刷 有限会社 アムキー

〒 669-1317 兵庫県三田市宮脇54-1

☎079-567-2515

---